

真っ白になりました。

「ねえ、わたしの話、聞いてる？」

そう言われ、我に返りました。これってデー
トっていうんだよね。夢じゃないよね。

「ホレも暇だから、つき合ってもいいぜ」

「それじゃいっしょに行こう、決まりッ！」

自転車を転がし、二人で歩きました。

しばらくくして、●●君との約束を思い出し
ました。●●さんからの誘いに、すっかり忘
れていました。僕も●●君も携帯を持ってい
ません。連絡をとることはできませんでした。
急用ができたからとか理由をつけて、二学期
になったら謝ればいいのか、そう思いました。
携帯がないのだから、連絡できなくてもしか
たないよな、そう自分に言い聞かせました。

僕は、有頂天でした。クラスで一番人気の
女子と二人でデートをしている現実、僕ほど
幸せな人間はいないだろう、そう思えました。

幸せいっぱい気持ちで家に帰ると、母に
「今日はどこに行っていたんだい？」

と聞かれました。雲行きが怪しい感じですよ。

「●●君と●●へ行ってたのに決まっているじゃないか。突然、何を言うんだよ」

「嘘をつくんじゃないよ。おまえが時間になつても来ないから、●●君は心配して、うちまで来たんだよ。どこに行っていたんだい」

その迫力には本当のことを言ってしまったました。

「まったたく、おまえって子はサイテーだね。友だちとの約束を破って、女の子と遊びに行くなんて。開いた口がふさがらないよ」

言い訳を聞いてくれる様子はありません。

「今日ほど絶望したことはないよ」

母にこんなに怒られたのは、はじめてでした。

「●●君に謝っておいで。謝ってくるまで家には入れないよ」

母に言われ、謝りに行きました。●●君は「一気にしてないから。怒っていないから」

玄関先で頭を下げて謝る僕に言いました。

●●君は怒っていません。よかったです。そう思い、家路につきました。

小学校六年生の夏休みが終わり、二学期は
 始まりました。●●君はいませんでした。
 「●●君はお父さんの仕事の関係で、急に引
 つ越すことになりました」
 そう先生が言いました。
 とんでもないことをしてしまいました。●
 ●君にとつて、僕たちと思い出を作れる最後
 の夏休みでした。なのに僕は約束を破りまし
 た。●●君がどれほどがっかりしたか、悲し
 かったか。「二学期になったら謝ればいい」
 と、約束を適当に考えが自分は浅はかでした。
 そして、夏休みがくるたびに●●君と約束
 を破ったことが思い出され、後悔の念が僕を
 襲います。
 『こころ』を読めば何か解決のヒントが得ら
 れるかと思いましたが。夏休みの間『こころ』
 と向き合うことで、何かの回答を得られるか
 もしれないと思いましたが。しかし、得た回答
 は「友だちを裏切ったことを、一生後悔しな
 さい」だったのかもしれません。